

明治30年、すでに岩見沢に移住していた岐阜県人林喜太松、林荘太郎ら数名は、奥地を視察した結果、下常呂原野は有望の地と認め、北海道未開地処分法による土地の貸付を願った。北海道未開地処分法は、出願した土地の貸付を受け、一定の期間内に一定の開墾をすれば無償で付与されるという規則であったので、土地の欲しい者には棚ぼた式の誘いであった。網走に宿泊し、数日を費やして出願手続きを済ませたが、当時網走には宿舎3軒しかなく、宿泊に苦労したが、ようやく準備を整え一応岩見沢に帰り、入地準備を進めた。

一方、林荘太郎、林米吉らは、郷里岐阜県へ入植希望者の募集に出かけた。
翌31年春（注：5月）、岐阜県からの移住者は岩見沢組と合流。林喜太松、林荘太郎、林美喜太郎、竹中徳松、松井弥助、名知九一、吉田栄太郎、林米吉、向井徳次郎、藤橋幸作、高橋藤弥、山田栄蔵、長谷川彦蔵、林与平、久保田末治、林金次郎、吉岡浪二郎、林松治、林千代吉、松井竹松、高橋清治ら21戸は家族と共に入地し、西3線以西のライトコロ川畔の平地に占居した。

（注：「岐阜区開基百年史」には、岐阜県からと岩見沢からの移住組それぞれの出身地を記載している。また、21戸の名前に誤植と思われる違いがあるが、精査の程度を考慮して「岐阜区開基百年史」記載の名前に変更している。）

一方、前年（注：明治30年3月）、鑑沸に入地した石塚利吉は西3線の砂丘の下に開墾小屋を建て、愛媛県人藤枝見取は西4線4号のライトコロ川左岸の高台との中間の小高いところ（現寺町義則所有地）に小屋掛けをして農場経営を計画した。しかし、密林の中に点在する拝み小屋の開墾小屋ばかりなので、隣に岐阜県からの集団移民があるのを知らなかった。

かくして開拓が始められたが、当時の模様を現存する古老に談してもらおう。

*石塚利吉談

明治30年鑑沸に来て、31年西3線の砂丘の下に入った。その頃、岐阜県から十数戸の人が家族を伴い、わずかな荷物を背に丈なす雑草を踏み分けて奥地へ入っていく姿は哀れであった。自分たちは拝み小屋を建てて入った。

家は低いし狭いが、燃料の薪は豊富なので寒さはその割りではなかった。灯油がないので、魚場から魚油をもらってきて芯を入れて灯火とした。

食糧は馬鈴薯、手搗きの黒い麦飯、そば粉の団子、五升芋の塩汁、魚が只同然だったので塩焼きか三平汁が常食であった。

常呂や鑑沸へ出るのに砂山のアイ又道路（海岸暴風林内にその遺跡あり）では歩き難いので、平地の熊笹を踏み分けて通ったが、その経路が今は完全舗装の国道238号線になっている。

この秋の大水害でライトコロ川畔の人は、家も食料も失う惨状であったが、支庁から見舞いに白米1俵を全罹災者に下されたので、一同1粒1粒を有り難く噛みしめていた。

たことは忘れられない。

(注：明治31年8月31日より9月11日までの12日間連続豪雨の結果、常呂川大洪水。土佐団体の12〜13戸を残し、川沿・岐阜部落等下常呂原野一帯泥海と化す。

「聖徳太子碑70周年記念誌」)

*高橋やすの談

新婚の夢も覚めやらぬ明治31年草々、舅(高橋藤弥)、主人(高橋仙蔵)らが北海道移住の計画を立てたが、4月、主人が鯖江の歩兵三十六連隊へ教育召集で入隊したので、舅姑に手を引かれ、17才の世間知らずで渡道。空知太(そらちぶ)注：現在の砂川市空知太)までは汽車があったが、それから奥地は徒歩、下駄ばきで神居古潭、旭川と歩き、永山で奥地行きの服装に替えたといっても草鞋、脚絆だけで、わずかな手回り品を背負って残雪なお深い愛別、峠、白滝、6号(遠軽)と泊まりを重ねて徒歩旅行。途中で「こんな難儀をするくらいなら死んだ方がましだ。故郷へ帰りたい」と泣き出す人が続出。中央道路といても道分道路に等しく、頼る主人は兵営生活、舅姑を頼りに歩けば出会う人はアイヌばかり。湧別からワツカ街道に入ったら両側は海と湖、狭い砂嘴。今では観光道路の龍宮街道だが、その時は三途の川の河原でも歩くような気がして、地の果てに吸い込まれる思いをしながら鑑沸からオタチップのナラ林の中の小道を歩く内、石塚さんの小屋、そして懐かしい和人の顔を見た時は、万感胸に迫り、思わず泣いてしまった。

しかし、その夏に主人が除隊すると後を追ってきてくれ、以来70余年、共に泣き、共に励まし合って荒れ野に挑み…(略)

(注：「オタチップ」 『常呂町百年史』の「常呂町アイヌ語地名の記録」には、「オタ・チップ(砂の・舟)」の意。砂丘上の小高い山を舟に見立てた名であろう。常呂から砂丘上の旧道を行くと、澱粉工場(現在の小麦乾燥施設)のところを下る少し手前に、目立つ円頂山の下を通る。常呂平野の西3線からも見える。多くの日誌にこの名が出てくるのは目立った存在だったからであろう。今でも土地の人たちは西3線地先の砂丘のあたりをオタチップという由。地籍図には西4線地先の海側がオタチップとなっており(解説)

*高橋萬蔵(高橋藤弥二男)談

15才の小童(こわっぱ)で何も分からず、親父に連れられてきたが、青森に来て小樽行きの船を探したがないので函館に渡り、室蘭に出て、炭鉱鉄道で空知太までは汽車旅行であったが、そこから先は兄嫁の話のような苦労をして歩いたが、愛別で旧友の末という男に偶然出会い、懐かしさのあまり草の上に座り込んで話したことは忘れられない思い出がある。

オタチップから蛇の歩いたような道を現寺町幸三郎氏宅のところへ来て筏で川を渡ったが、この筏は角橋ができるまで重要な交通機関で、ライトコロ川左岸の者の米・味噌はこれによって川を渡り、そこから先は背負って運んだ。

常呂に米・味噌品切れの時は、網走から能取山道を駄馬で運んだ。

*山田栄太郎

私ら一家は他の人とは別行動で来たので、横浜から船で小樽に来て、大三漁場の送り入り船に便乗し、ポントマリ(常呂港)に上陸、先着の林喜太郎さんが迎えに来てくれたので、同氏宅に入り、開墾小屋の建築に着手。私は丸太の伐採、親父は切り込み、小屋掛けしたが、屋根は青笹がゴソゴソ鳴って熊が来たかと肝を冷やししながら、昼は開墾、夜は暗いカンテラの光を頼りに明日の準備。

熊や狐の鳴き声は毎晩のように聞こえ、寂しくて心細い。望郷の念を禁じ得なかったが、西南戦争生き残りの親父(栄蔵)は頑として開墾にいそしみ、大地を拓いて蒔きつけをした。

当時、入浴の設備がないので、週1回くらい一家揃って入浴に行ったが、これは途中で熊に襲われるのを防御するためであった。

ようやくして苦心惨憺、秋の実りを楽しんでいたところ、8月に入り豪雨続きで大洪水となり、8月31日から9月11日まで12日間水浸しとなり、命からがら光永商店裏の丘の上に避難、野宿したが食糧がないので現中学校(注・現在の町民センター)付近まで筏で行き、ようやく常呂と連絡。食糧を運んでもらって飢えをしのいだが、かの小丘は我々の生命を守ってくれた恩のある丘である。冬になっても食糧は流されてしまったので、ドンぐリを拾って蒸し、乾燥させて唐臼でつき、皮を取り、石臼は内地から持ってきていたので粉にして、少し残った馬鈴薯や小麦粉を混ぜて団子にして食べた。

この水害の水位は、現在の光永商店の2階の窓の下縁であった。

(注：5線6号西にあった光永商店の場所は、代々商店があった。最初は明治40年頃

から大正初期にかけてあった林次太郎商店、その後を引き継いだのが高橋仙蔵

商店、昭和40年代に光永次郎商店に、50年代に佐藤平三商店に替わり、平成7年
閉店)

なぜこのような水位になったかと言うと、常呂佐呂間の川(注：ライトコロ川)の水がサロマ湖にたまり、天然の砂嘴が破れてようやく減水したのでこの惨状を呈した。

この苦い経験により翌年からは春先、サロマ湖の水が落ちるのを待って、鎗沸裏の砂丘に水路を造り、早めに排水するようになった。その後はこのような惨事はなかったが、この大被害に人命事故がなかったことはせめてもの幸いであるとともに、このとき割合安全なところに占居の林喜太松ほか数名の決死の救助作業のおかげでもあった。この災害救助に努力した人びとに対して、ときの北海道庁長官から林喜太松に表彰状と木杯が下付された。(略)

この洪水の後、林喜太松は水に対して安全な箇所に住居を移すべく踏査したところ小高い場所を発見。直ちに貸付を出願したところ、これは自分に貸し付けされた1戸分の内であった。密林の中で方位方角が全然分からなかった当時のもよみを想像するに良い挿話である。

*小嶋つる(当時の苦勞を子供心に味わった思い出)談

31年秋の大洪水で収穫は皆無。現金収入の道がないので12才の子どもであった私も家の助けにと常呂の森本製軸工場の女工として雇われ(ガッチャ振りの)、いくらかの賃金を家に入れた。

家の方は、米・味噌など内地から持ってきて若干残っていたものが洪水で流され、アワ・キビ・大根・人参など水害跡に残ったもの、それにオヒヨウは置大のものでも15銭くらいで買ったので、これらの塩汁に麦、キビに甘藍(注:カンランキャベツ)などは鬼皮(注:外側の皮)のまま入れた雑炊か芋とドングリの粉との団子の常食でひと冬を越したが、良く栄養失調にならなかったものだと思う。

*内藤とよ談

10才で来たのでうろ覚えだが、オヒヨウのそばろをダシにした芋の塩汁、麦飯は手づきの麦を挽き割りにし、米はほとんど入っていない素割飯とをおいしく食べた。

その麦飯や塩汁も狭い小屋の中で生木を燃やして炊くので鍋釜の上はほこりでいっぱい。今の人では食べられないだろうが、実においしかった。

家といっても拝み小屋で狭く、戸などはなく、ムシロを吊してあるだけ。冬寒い時は腹は熱く、背中が寒いという焚き火。床は干し草の上にムシロを敷いた土間、吹雪の時などは夜具の上に雪が積もって重くなる。

夜ともなれば暗いカンテラの裸火の油煙が出て鼻くそが真っ黒、その火の下で衣類の繕いをしてくれた母のことが思い出される。(略)

*田房まつ(愛媛県からの入植者)談

私たちは明治30年石狩の幌加内に農場経営の目的で藤枝見取に連れられて入ったが、幌加内より下常呂原野が有望だということで、翌31年、現寺町幸三郎氏所有地の川と山の間の小高い清冽な泉のあるところに掘って立て小屋を造り、農場事務所として50町歩の貸付を出願、一大藤枝農場を夢見ていました。この付近には人家は一つもなく、裏の高台は熊のすみか、シャモ(和人)の顔どころかアイヌ人の顔も滅多に見られず、この年に岐阜の人が入られたことは後から分かったくらいで、付近に家ができたことなんか全然分からない密林でしたので、ロビンソン・クルーソーの漂流を実現したような生活でした。

この年の秋、大洪水があり、見下ろす原野一帯湖となってしまい、藤枝牧場は計画を変更して斜里に移り、この地の後始末を寺町幸三郎氏から任せられたので、私たち夫婦は農場の一部の単独貸付を受けて開墾を始めました。又なすクマザサを鎌で刈り、島田鍬で手耕しでの開墾なので、1反(10アール)の畑も数日かけなければ開墾できず、ヤブ蚊に苦勞は、ブルドーザーで抜根し、トラクターで起耕する現在の人たちでは想像もできないでしょう。(略)

このようにして開拓に従事した人の服装はといえば、男は織色、織紺の木綿シャツ、雲斉のモンペ、手製の地下足袋に草鞋、軍手などはなく手甲の勇ましい姿。女は半天の襟や袖にボタンを付けて昆虫の侵入を防ぎ、モンペやズボンはなく、足は脚絆のみの姿で顔面を手ぬぐいで包み、はちまきを締め、木綿くずの火縄に点火してはちまきに挟むか腰に下

げるかして、この煙と香りでブヨ、蚊などの害を防ぐのであったが、風通しの悪い密林、南方戦場のシャングルを思わせる湿原の中、ブヨ、蚊、アブの群棲の中に笹刈り鎌と島田鍬で開墾に従事した人たちの労苦は筆舌に尽きない。(略)

『岐阜部落開基80周年記念誌』掲載

(昭和44年7月発行)

岐阜団体の先駆者高橋藤弥一行の旅行状況

『常呂村史』(昭和12年9月発行) から抜粋(現代文で編集)

(略) 岐阜団体の先駆者高橋藤弥一行の旅行状況を調査すると、郷里岐阜県から汽車で青森に着き、青森港から乗船して室蘭に上陸。深川まで開通していた汽車を利用して深川駅で下車。ここで草鞋、振り分け荷物の旅装を整えて北見路へ、石北峠を越し、空知太、神居古潭、永山、愛別九号、瀬戸瀬、下湧別を経ておおよそ十里ごとに設けられた官設駅通または民家に宿泊を重ねること九泊十日で辛くも目的地にたどり着いたが、道路は膝までぬかるみ、熊笹や雑草が身の丈まであり、巨木が道路の両側から覆って陽光を遮っている。そんな状況で衣服は寸断し、殊に股引は敗れ去り、ついには肉を破り鮮血に染まる者さえいた。老幼婦女子の中には余りの苦痛に耐えかね、路傍にとっかか座して号泣し、「ここで死んでも動かない」と言う者も生じるに至り、訳もなく望郷の念と共に、思わず一行も共に泣いたという。(略)

(注：汽車利用の記述で岐阜在住者の体験談と一部違つが、そのまま掲載)